

NPB と MLB におけるスイッチヒッター特性の相違と
日本における MLB 的スイッチヒッターの必要性についての研究
A study on the distinction of NPB-type and MLB-type switch hitters,
And the necessity of MLB-type hitters in Japan

1K07B029-6

指導教員 主査 磯繁雄 先生

牛場万里央

副査 田内健二 先生

【目的】

日本では足の速い小技の利く1番～2番バッターがスイッチヒッターに多い。一方メジャーリーグには日本と同じような俊足のスイッチヒッターもいるが、多くはパワーヒッターとして知られ、特にクリーンナップを任されるチームの主軸に多い。

チームの主軸が対戦相手の投手の左右に関らず、必ずラインアップの中央に君臨できれば、監督にとっては理想であり、選手にとってもベストスキルであろう。

ではなぜ日本には脚力に頼らない、主軸を任せられるようなスイッチヒッターが存在しないのか？その理由を究明し、その必要性について考察する。WBC で二連覇を果たし、世界一の野球をプレイしていると思われる日本のプロ野球。これからのさらなる日本の野球の発展のためにこのことを問いたい。

【方法】

日米双方の公式記録から、スイッチヒッターの現状、スイッチヒッターのこれまでの足跡をたどり、日本的スイッチヒッターと MLB 的スイッチヒッターの特性を明確にする。

具体的には、打率、打点、ホームラン数、安打数とスイッチヒッターの関与を日米双方の公式記録から抽出する。日米双方を代表するスイッチヒッターの記録、エピソードを抽出し、文化的相違の影響も調査する。

さらに、私が所属する早稲田大学野球部においてアンケート調査を行なう。「スイッチヒッターの意識調査」、「右投げ左打ちバッターについての実態調査」、「チーム内の主軸バッターのスイッチヒッターの考え方」についてスイッチヒッター、右投げ左打ち、主軸の計 25 名を対象に実施。

【結果】

日本ではスイッチヒッターの数が登録野手の約 5%にとどまるが、アメリカでは平均 16%に上り、チームによっては 7 名のスイッチヒッターを有する。

日本のスイッチヒッターの根本的な転向動機がスピードを生かすためであることがアンケート調査からも明らかになった。歴代の名スイッチヒッターも脚力を誇り、加えて高打率、高得点を上げているが長打力に欠け、打点を上げるタイプは誰もいなかった。

MLB: スwitchヒッターの数が多くスイッチヒッターになることが珍しく無い。全く自由な発想の元、あらゆるタイプのスイッチヒッターが存在する。MLB を代表する大打者がスイッチヒッターであるので、スイッチヒッターの存在感とイメージが日本のものと異なる。現役のスイッチヒッターもスピードのあるリードオフマ、長打とスピードを兼ね備えるチームの主軸、ホームランキングと多様。

【考察】

日本ではパワーヒッターを外人枠の補強で補う傾向にあり、加えてスイッチヒッターそのものが減少。主軸を打つスイッチヒッターが育つ環境が無い。反面右投げ左打ちが増加しているのは転向を試みるバッターが左打席に立ってそちらが上手いくと右打ちを捨てて左打ちに専念するため。その背景には二兎追うもの一兎も得ずという日本人的精神が働く。スイッチヒッターになるには2倍の練習量が必要であると思っている。バッティングにおいての相手との勝負よりも自身を鍛錬で磨くという考えが特徴的であると思う。松井秀喜、イチローという右投げ左打ちヒーローをみて育っていることも影響を与えている。現状パワフルなスイッチヒッターは突然変異的に出現することを待たざるを得ない。